
 研究ノート

《Philo Latinus》序説

— 4, 5世紀ラテン教父とフィロン —

野 町 啓

I

書誌学者は、古代なり中世の著作家の fortuna, もしくはその著書の fatum を問題にする。これは、換言すれば、ある思想家の影響史を辿るうえで、重要な一局面をなす伝承史の問題といふことができよう。例えば、本稿で問題にするフィロンについてその思想を検討しようとする場合、彼の著作全体なり、あるいは著書のそれぞれの成立史を考えることも無論重要である。しかしフィロンの伝存する著作は、プラトン、アリストテレスに優るとも劣らない厩大な量にのぼるのであって、これは決して偶然の業によるものとはいえないであろう。例えば、われわれが参看しうる彼の著作の集成をみても、1742年にロンドンにおいて Th. Mangey により刊行された2巻本の全集は、ギリシア語テキストにラテン訳が並記されているとはいへ、1,400頁余からなり、最初の Kritische Ausgabe であるいわゆる Cohn-Wendland 版 (1896—1930) もテキストのみで6巻にのぼる。さらに、これに加えて、後にも問題にする P. J. Aucher (アヴゲル) により発見され、1826年、ラテン訳を付してヴェニスで刊行された『創世記ならびに出エジプト記問答』のアルメニア語断片、およびその他の断片や偽書等も含め F. H. Colson, G. H. Whitaker, ならびに R. Marcus によって1929年以降刊行され1953年に完結をみた Loeb 版、ならびに全35巻の予定で C. Mondésert 等の編集により1961年以降刊行されている *Les œuvres de Philon d'Alexandrie* (いわゆる Cerf 版) は、タイト

ルだけでも36を数えるのである。このようにかなりの量の著作が、成立以降ほぼ2,000年の懸隔にもかかわらず伝承されてきている事実は、フィロンがそれ相当の影響力を及ぼしてきたことを物語っており、ひいては影響史と伝承史とが不可分の関係にあることを示唆しているといえるのであって、フィロンの思想なり意義は、その著作自体のいわば内在的分析にとどまらず、伝承史上の考証が合せてなされることによってはじめて解明されうるとさえいいうるのである。

伝承史を辿るにあたって不可欠の課題は、写本の系譜の確定ならびに特に16世紀以降盛んとなる印刷刊本の歴史とを明らかにし、さらにこの両面を連続さすことであろう。これは、フィロンといった古代の著作家に即していえば、古代から近世初頭に至るその fortuna を追跡することにほかならない。しかし、古代・中世の著作家に関するこの方面の研究は、影響史とのかかわりからするその重要性にもかかわらず、必ずしも十分になされているとはいえない。たしかに写本伝承の基礎的研究としては、例えば H. Hunger 等による *Geschichte der Textüberlieferung der antiken und mittelalterlichen Literatur* (Bd. I Antikes und mittelalterliches Buch- und Schriftwesen, 1961, Bd. II Überlieferungsgeschichte der mittelalterlichen Literatur, 1964) や L. D. Reynolds, N. D. Wilson による *D'Homère à Erasme. La transmission des classiques grecs et latins* (1984) 等があげられる。だが、これらは純粋に書誌学的・文献学的関心からするものであり、先にふれた伝承史の二面を連続化してみる視点に立脚するものとはいえず、ちなみに浩翰にわたる両著をとってみても、本稿のテーマであるフィロンに対する言及はみられない。思想家のパースペクティブからなされた研究としては、筆者の目にふれた限りでは、Charles B. Schmitt による *Theophrastos in the Middle Age* (1971)⁽³⁾、*Cicero Sceptics. A Study of the Influence of the Academica in the Renaissance* (1972)⁽⁴⁾ に示される一連の研究や、*Traditio* に連載された Pearl Kibre の“Hippocrates Latinus”⁽⁵⁾があげられる。また同じく Kibre による“The Intellectual Interests Reflected in the Libraries of the Fourteenth and Fifteenth Centuries”⁽⁶⁾ならびに J. T. Muckle の“Greek Works Translated Directly into Latin before 1350”⁽⁷⁾ (1942, 43)、また E. Cranz の“The Publishing History of the Aristotle Commentaries of Thomas Aquinas”⁽⁸⁾ (1978) 等の諸研究は、先にふれた伝承史の二面性からして、直接フィロンを対象とするものではないにせよ、問題意識

の上から重要な意義をもつものといえよう。

筆者の関心は、フィロン伝承史がどこまで再構成されうるか、とりわけ、伝承史の一過程として、《Philo Latinus》とでもいべき問題を考えることにある。フィロンの著作が散逸を免れ、テキストがほぼ完全な形で今日に至るまで伝承されてきた要因の一つは、キリスト教教父により彼の思想が着目され、なんらかの批判を含みながらも是認され、聖書のテキストの確立や釈義の上で援用されてきたことに求められる。この点は、例えばキリスト教内部で異端の宣告を受けたオリゲネスや、あるいはキリスト教の敵対者として禁書にされたポルフェリオスといった人々の著書の *fatum* と比較すれば一層明らかであろう。⁽⁹⁾ 無論キリスト教教父という場合、東方・西方の二面から考慮されなければならない。だが、ここであえて《Philo Latinus》を問題にし、さらに検討の対象を4世紀から5世紀前半のいわゆるラテン教父に限定するのは、当時のフィロン受容の背景にあるいくつかの興味ある事実や、フィロン研究史を勘考したうえでのことであって、その具体的理由は以下の叙述によって示されることになる。

古代の著作家なりキリスト教教父によってフィロンに対し *nominatim* な言及がどのようになされてきたかは、先にふれた Cohn-Wendland 版 *Opera Philonis* 第I巻に掲載されている *Testimonia de Philone ejusque scriptis* を参照することにより一応の展望をうることができる。⁽¹⁰⁾ そこには、フィロンとほぼ同時代の Josephos (*Ant. Jud.*, XVIII, 8, 1) から13世紀ビザンツの Theodorus Metochita に至る証言が集成されている。そしてアレクサンドリアのクレメンス、オリゲネスといったギリシア教父による言及が多くみられるのは、同一の言語圏に属する点からして当然だといえるが、ラテン教父による言及は、この *Testimonia* に依拠する限りヒエロニムス、アムブロシウス、アウグスティヌスという三人によって、つまり4世紀になってはじめてみられることになる。そしてこのことは、後にもふれるように、西方世界におけるギリシア語の読解力の衰退期にこの時代が相当することを考慮に入れると、興味深いものがある。例えば、H. L. Goodhart ならびに E. R. Goodenough による1937年までのフィロンに関する *Bibliography* (本稿註(1)参照) や、それ以降1981年までを集録した E. Hilgert による *Bibliographia Philoniana* (in A. N. R. W., II, Bd. 21, 1, pp. 47-97) を一覽しても、フィロンのギリシア教父による受容・影響に関する研究はかなりの量にのぼるといえるが、これに反しラテン教父とフィロンの関連に関する研究はきわめて乏しい。これ

は、ギリシア教父とフィロンとは、同一の言語圏に属し、したがって実際のテキスト上の対応や発想の類似を検証することがある程度可能であり、直接的な影響の有無を問題にすることが比較的容易であることにもなろう。しかし、言語を異にする当時のラテン教父の場合、フィロンの受容なり伝承の前提として、ラテン語への翻訳の存在を想定する必要が生じてくる。そしてこの問題は、以下にふれるように、アウグスティヌスとフィロンとの関連をめぐって重要な論点を提供することになってくるのである。

アムブロシウスとフィロンとの関連について2巻にわたる浩瀚な研究を著した H. Savon は、アムブロシウスによるフィロンの《retractatio》を指摘する⁽¹¹⁾。フィロンとラテン教父との関連の問題は、異なった二つの言語間の交流にとどまらず、さらにキリスト教とユダヤ教との関連といういま一つの問題がそこに介在し、二重の注目すべき問題を含んでいる。フィロンに言及する場合、アムブロシウス、アウグスティヌス、ヒエロニムス、いずれの教父においても、「ユダヤ人」という限定が付されているのであって、B. Blumenkranz や J. Gager の研究が示すように、当時のキリスト教徒にとって、ユダヤ教との関連をどう考えるかは、重大な問題であった⁽¹²⁾。つまり、言語・宗教の二面から、フィロン受容に際し、retractatio のなされるべき契機なり必然性があるといえるのであって、これは、アムブロシウスの場合、retractatio がどのような契機によるものなのか、なお検討すべき点があるとはいえ、一人アムブロシウスだけの問題ではなく、他のラテン教父にも妥当するように考えられるのである。無論本稿ではこの問題に立ち入ることは不可能であって、今後 Savon の研究をふまえて、アウグスティヌス等についても、フィロンについて言及がなされ、もしくは積義上フィロンと類似性がみられる点を精査していく必要がある。またフィロンと4、5世紀の西方ラテン教父との関連を考える場合、いま一つ等閑視すべからざる問題に、そこにおけるオリゲネスもしくはオリゲネス主義の影響と評価の問題がある。以下にみるように、エウセビオス、ヒエロニムスといった教父にせよ、あるいは Bibliotheca Caesariensis にせよ、フィロンのテキスト伝承のトレーガーとして、さらにその西方への媒介において主導的役割をはたしたと考えられる諸契機は、いずれもオリゲネスとなんらかのゆかりをもっているからである。フィロンの西方ラテン教父の受容なり影響を思想的に検討しようとするれば、まず前提として、先にふれた当時のキリスト教とユダヤ教との関連と共に、フィロンとオリゲネス、オリゲネスと西方ラテン教父との関連が考慮されなければならないのであって、

今後その方面の立ち入った研究が期待される。フィロンのテキスト伝承の問題に限定しても、6世紀以降になれば、そこに複雑きわまりない写本の系譜をもつ〈Catena〉⁽¹³⁾、〈Florilegium〉の問題が登場することになる。本ノートは、フィロンとキリスト教との関連を考える予備的考察として、問題を4、5世紀ラテン教父に限定し、どのような経路で彼らがフィロンと接触するに至ったのかを、主としてテキスト伝承の面から検討するものである。

II

キリスト教内部において、個々の断片的な言及は別として、フィロンに関し包括的な叙述を最初に試みたのはエウセビオス (c. 260—339) であろう。彼の『教会史』第II巻には、フィロンの著作に関する言及がいくつかみられるが (例えば II, 5, 1; 5, 6; 6, 3), ことにその第18章には、フィロンの著作の総目録 (πίνακα) とでもいうべき叙述がなされ、そこでは全30タイトルがあげられている。ここにみられるものの他に、2タイトルがエウセビオスの同書の他の箇所⁽¹⁴⁾にあげられており、したがって、彼は、実際それらの内容いちいちにまでもふれたかは別として、フィロンの著作として総計32の書名を知っていたことになる。エウセビオスによるフィロンの著作目録を、フィロン研究に際し最も依拠される先にふれた近代の諸刊本、例えば Cohn-Wendland 版、Loeb 版、Cerf 版等に収録されているフィロンの著作と比較した場合、両者は必ずしも一致しない。細かなタイトルの異同、さらに、エウセビオスにおいては今日偽書とされている《Ἀλέξανδρος, ἢ περὶ τοῦ λόγου ἔχειν τὰ ἄλογα ζῶα》が含まれている点、またエウセビオスにはあげられていても伝存されておらず、今日の刊本には含まれていないもの——書名だけを比較した場合、無論この逆のケースもあるのであるが——があり、さまざまな問題をはらんでいる。

ここで、エウセビオスにみられる書名との比較においてとりわけ興味をひくのは、近代のフィロン全集において、その基礎となる1742年ロンドンで刊行された Thomas Mangey による *Philonis Judaei Opera* (2 vols.) 以来、その巻頭におかれるのが慣例となっている《*De officio mundi*》(περὶ τῆς κατὰ Μωυσέα κοσμοποιίας) に該当するものが、エウセビオスには欠如していることである。これは、フィロンの著作それぞれの特色づけとそこからするそれらの分類の問題、ひいてはフィロンの思想自体の核心

をどうとらえるかという問題とかかわり、例えば先の Cohn はフィロンのテキスト研究において先駆的意義を担う *Einteilung und Chronologie der Schriften Philos* (Leipzig, 1899, S. 8 et 22 sqq.) において、《*De opificio mundi*》を聖書のアレゴリカルな解釈とみなし、全集の巻頭におくことを批判している。もっともエウセビオスは、*Praeparatio Evangelica* (VIII, 13) においては、《ἀπὸ τοῦ πρώτου τῶν εἰς τὸν νόμον》の書名で、われわれのいう《*De opificio mundi*》からの引用を行ってはいいるが、『教会史』第Ⅱ巻の当該箇所についてみる限り、同書に対する言及はない。そうすると、Mangey 版以降《*Legum Allegoriae*》(Ⅰ—Ⅲ)と称される《*Νόμιον ἱερῶν ἀλληγορίαι*》は『創世記』2章1節から3章19節を対象とし、また《*Τὰ ἐν Γενέσει καὶ Ἐξαγωγή ζητήματα*》としてエウセビオスがあげる『創世記問答集』は、ギリシア語では断片的にしかなく、伝存しているアルメニア語訳は『創世記』2章4節から、ラテン語訳は『創世記』25章20節からであり、したがって、『創世記』の第1章に関するフィロンの著作は知られていなかったことになってくる。そしてこの問題は、ことにアムブロシウスとの関連において、4世紀のラテン教父とフィロンとの関連の問題に、先のアルメニア語断片の発見とラテン訳を行った Aucher に触発され、今世紀において先鞭をつけた H. Lewy の研究 (*Neue Philontexte in der Überarbeitung des Ambrosius. Mit einem Anhang: Neu gefundene griechische Philonfragmente, Sitzungsberichte der preussischen Akademie der Wissenschaften, Jahrgang 1932, Philosophisch-historische Klasse, 1932, S. 23-84. Bibl. no. 438*) や近年 Savon によるその再評価 (H. Savon, *Saint Ambroise devant l'exégèse de Philon le Juif*, esp. t. II, p. 13, n. 22 — 本稿註(11) 参照 —), 換言すれば今日散逸してしまっている『創世記』の初めの部分を対象とするフィロンの『創世記問答集』の冒頭部分のラテン語訳の4世紀における存在と、アムブロシウスによるその利用の問題とかかわり、注目を要する。だがここでは、さらにその前提となるべき問題、つまり近代の刊本からみて量的に龐大に及ぶフィロンの著作が、どの程度アムブロシウス、ヒエロニムス、アウグスティヌスといった4、5世紀の西方ラテン教父に知られていたかを、まず考えてみる必要がある。

たしかに、ヒエロニムスは、その *De viris illustribus* 第11章をフィロンにあて (PL 23, 662 BC), その生涯とエウセビオスにはほぼ匹敵するかなりの数にのぼる著作目

録をあげてはいる。しかし、彼はエウセビオスに依拠しているところが多大であって、⁽¹⁵⁾実際にそこにあげているものの内容を知っていたか否かは疑問である。4世紀のラテン教父とギリシア語文献との関連を考える場合、写本の伝承経路の問題と共に、先に指摘したところであるが、アウグスティヌスの著作（例えば *De Trinitate*, III, proem. 1）やヒエロニムス宛書簡40（ことにその6, PL 32, 158）等からうかがえるように、《*Graecum est non legitur.*》という西方ラテン世界におけるギリシア語知識の減少の問題を考慮に入れる必要がある。⁽¹⁶⁾フィロンのアウグスティヌスに対する影響が問題となり、直接的な影響をみる Altaner の見解と、⁽¹⁷⁾これを批判しアムブロシウスを介した間接的な影響を主張する Courcelle の見解との相違があるが、この場合 Altaner のいう直接的（direkt）とは、ギリシア語原典からの直接の影響の存在ではなく、先にふれた『創世記問答集』のラテン語訳の当時における存在を想定したものであって、その意味では、いずれの見解も結局は間接的影響を意味するものなのである。

ところで、4世紀のラテン教父におけるフィロンの知識の問題を解く重要な鍵の一つは、時代はとぶが15世紀における有数の写本蒐集家であったニコラウス・クザーヌスの所蔵にかかわるフィロンの写本に求めることができるように考えられる。⁽¹⁹⁾これは《*Codex Cusanus 16*》と呼ばれるものであるが、まず最初に先にふれたヒエロニムスによるフィロンの生涯と著作目録がおかれ（fol. 2^r, Hieronimus de Philone IN catalogo virorum illustrium）、これに《*Genesis*》と題されるフィロンの著作が続き（2^v-88^r）、その後空白をおいて3世紀の Tyros の Apollonios の《*Historia*》（97^r-123^v）の写本があり、巻末（124^r-153^v）に『創世記問答集』のラテン語訳がおかれるという構成をとっている。この場合、まず問題となるのは、例えばエウセビオスなりヒエロニムスのフィロンの著作目録、もしくは近代のフィロンの印刷刊本のどれをみても、《*Genesis*》というタイトルの著作に該当するものがみられないことである。この点は、Paul Wilpert が、写本の校合に基づく研究、ならびに《*Genesis*》が内容上クザーヌスの *Conjectura de ultimis diebus* において《*Historiae*》と題されるフィロンの著作からの引用と一致することから、中世においては《*Historiae*》と称され流布したフィロンの偽書であることをつきとめて⁽²⁰⁾いる。さらに写本の上でいえば、《*Codex Cusanus 16*》は、同時代のフィロンのラテン語写本、例えば《*Vaticanus latinus 488*》、さらにはフィロンの最古のラテン語写本である11世紀の《*Cassellanus theologicus 4.3*》とほ

ほぼ同様の構成をとっている。⁽²¹⁾そしてこうした写本の構成からすると、中世ラテン世界において、ラテン語訳が存在し、かつ実際に知られていたフィロンの真正の著作は、『創世記問答集』のみということになってくるが、問題は、この『創世記問答集』のラテン語訳そのものの内容がからまり、さらに複雑な様相を帯びることになってくるのである。

『創世記問答集』の現存するラテン語訳は、途中欠落はあるが (ad Gen. XXVI, 19-35), 『創世記』25章20節から28章9節を対象とするものであり、5世紀に成立し、Aucher が校訂、出版したアルメニア語訳第4巻154問から245問に対応している。⁽²²⁾ちなみに、フィロン自身が『創世記』50章全体にわたる『問答集』を著したかどうかは不明であるが、アルメニア語訳全4巻が、現在では Catena, Florilegium 等に断片的に伝存するギリシア語原本——それは全6巻から構成されていた⁽²³⁾——の全容を包むとすれば、例えばアウグスティヌスが *Contra Faustum* (XII, 39) において名指しでフィロンを批判している『創世記』6章16節にみられるノアの箱船の構造に該当する「問答」——アルメニア語訳第1巻は『創世記』2章4節から始まり、『創世記』の当該箇所は同6章14節から10章9節までを対象とするその第2巻に含まれている——は、ラテン語訳では現存しない。だが、アウグスティヌスにこのような欠落部分に対する言及のあることから、先にふれたように、アウグスティヌスにとどまらずアムブロシウスとのかかわりにおいて、『創世記』の全体、もしくは少なくともその冒頭部分を対象とする『創世記問答集』の存在が推定され、むしろ逆にアムブロシウス、アウグスティヌスといったラテン教父の著作を基に、ギリシア語原本はいうまでもなく、ラテン語訳、アルメニア語訳にも欠落している部分の再構成の可能性が主張されることになるのである。

さて、アルメニア語訳とラテン語訳とを対応している部分について比較した場合、後者の方が量的に多いことがしばしば指摘されている。⁽²⁴⁾この問題は、ラテン語訳には、アルメニア語訳では欠落している『創世記』29章19—35節が含まれ、第195問の後に11のセクションが付加されていることから一つの解決策を得ることができる。しかし、他面、この問題は、例えば先の《Codex Cusanus 16》、あるいは他のラテン語写本と、1520年のパリ版に始まり、さらに1527年に Budaeus 訳を含む Srichardus による編集刊行等の近代の印刷刊本との比較において、『創世記問答集』以外にもラテン語訳が存在し、西方ラテン世界に知られていたと考えられるいわゆる《*De vita contemplativa*》

といういま一つのフィロンの著作の存在を浮かび上がらすことになってくるのである。つまり、ラテン語写本の『創世記問答集』は、これのみからなる1520年のパリ版のタイトルからうかがえるように (*Philonis Iudaei quaestiones centum et duae, et totidem responsiones morales super Genesin, latine, ex editione Aug. Justiniani, Parisiis*), 『創世記102問答集』と称されていたわけであるが——つまり154問から245問の91問とアルメニア語訳にはみられない11問を加えて102問ということになる——、1520年のこのパリ版では巻末の102問の最後の部分が一部欠け、それに現在《*De vita contemplativa*》と称されているもののラテン語訳の冒頭数行を欠いたものが合本 (*Convolut*) されている。この点は、1895年に出版された F. C. Conybeare, *Philo : About the Contemplative Life* により、研究史上、一つのエポックが画されたといつてよい。⁽²⁵⁾そしてこの点でさらに注目を要するのは、下記のような構成からなる1527年Baselにおいて印刷刊行されたSichardus版である (*Bibl. no. 445*)。 *Philonis Iudaei Alexandrini, libri antiquitatum. Quaestionum et solutionum in Genesin. De essaeis. De nominibus Hebraicis. De mundo*, GVLIELMO BVDAEO interprete, [ed. J. Sichardus] Basileae, Adamus Petrus, August 1527, folio, pp. viii, 142.

Sichardus版においては、《Codex Cusanus 16》、あるいは他のラテン語写本において《*Genesis*》もしくは《*Historiae*》と称されたフィロンの偽書が、ヨセフスの『ユダヤ故事』 (*Antiquitates*) のひそみにならって《*Libri Antiquitatum*》と呼ばれ、また1520年パリで出た最初のフィロンの印刷刊本においては『創世記問答集』に不完全な形で付されていた今日《*De vita contemplativa*》と称される著作のラテン語訳が、内容に即して《*De Essaeis*》というタイトルが付されて、『創世記問答集』からはじめて区別されることになる。《Codex Cusanus 16》と同系統に属すると思われる中世の諸写本 (*Bibl.* のラテン語写本の分類ではA, グループ1)⁽²⁷⁾において、巻頭のヒエロニムスの *Vita Philonis* と著作目録に続いて《*Historiae*》もしくは《*Genesis*》のタイトルの下に中間におかれるのを慣例としたこの《*Libri Antiquitatum*》が偽書であることの指摘は、1566年Sixtus Senensis (Sixte de Sienne) が著した近代教父学の端緒を開きたいわゆる *Bibliotheca Sacra* によってはじめてなされたという。⁽²⁸⁾彼はユダヤ教から改宗したドミニコ会の修道士であったというが、Savonによれば、このSixtusこそが、先の *Bibliotheca Sacra* の過去の主要な聖書註釈家を扱った第4部において、ア

ムプロシウスのフィロンの利用を指摘した研究史上最初の人物であり、17世紀以降のサン・モール学派 (Mauristes) によるアムプロシウス等の教父研究の道を開いたとい⁽²⁹⁾のである。また、Sichardus がヨセフスの著作との連想の下に、《*Libri Antiquitatum*》という書名を付したことには、例えば西方ラテン世界へのフィロンの紹介者として、また *nominatim* にフィロンを最も多くあげているヒエロニムスの影響が考えら⁽³⁰⁾れる。ちなみに、アウグスティヌス (*Contra Faustum*, XII, 39) にせよ、アムプロシウス (*De Paradiso*, 4, 25) にせよ、フィロンの名前をあげているのは、それぞれただ一回にすぎない。これに対し、ヒエロニムスは、*nominatim* にはフィロンを最も多くあげ、さらにフィロンの名をあげる場合、ヨセフスと並べる傾がみられるのであって、それが一つの伝統化したことに、この Sichardus にみられるタイトルづけの発想の淵源を求めることができよう。そしてこの点は、以下に述べるように、フィロンが西方ラテン世界に伝承され注目されることになった理由の一端とも関連してくるよう⁽³¹⁾に考えられる。なお、《*De vita contemplativa*》、Sichardus のいう《*De Essæis*》についていえば、Conybeare は、このラテン語訳と『創世記問答集』とが同一の訳者によるものであり、使用聖書テキストがヒエロニムス以前のものであることや語法・文法上の特色等の根拠から、300—400年の間、ことに後者の第73問にアポリナリオス批判をうかがわせる挿入のあることから、400年以前にすでに成立していたという推定を行⁽³¹⁾っている。

では、以上のように、ここで当面の課題としている4世紀西方世界に伝存したフィロンの著作が、《*De vita contemplativa*》ならびに『創世記問答集』であると仮定した場合、歴大といってよい彼の著作のなかであって、なぜ、またどのような経路を経てとりわけこの二点が西方キリスト教世界に伝承されたかをここで考えてみなければならない。『創世記問答集』の場合、その著作の対象・性格からして、キリスト教教父が関心をもつのは当然だとしても、《*De vita contemplativa*》はどのような契機から着目されるに至ったのであろうか。ここで本章の冒頭にふれたエウセビオスをふり返ってみる必要がある。なぜならば、エウセビオスこそ、東方・西方を問わず、キリスト教世界にユダヤ人フィロンの存在を広く知らしめ、彼をキリスト教世界に受容可能なものとする素地、基盤を提供した人物だと考えられるからである。フィロンには、アムプロシウスなりアウグスティヌスによって言及される場合、第1章においてふれたように、あくまでもユダヤ人という限定が付されている。したがって、正統信仰確立期におけるキリスト教会

においては、神学上、実際の生活上、ユダヤ教との論争があったことを考慮に入れるならば、ユダヤ人フィロンを受容もしくは利用するにあたっては、その前提として《Philo Christianus》とでもいうべきフィロン像、フィクションがあらかじめ構成されていなければならない⁽³²⁾、その点において多大の寄与をはたしたのが、ほかならぬこのエウセビオスであり、また、この目的にあたってエウセビオスが援用したのが、この《*De vita contemplativa*》であったと考えられるのである。

エウセビオスは、先の『教会史』第Ⅱ巻において (II, 16, 1-17, 3)、フィロンの《Περὶ βίου θεωρητικοῦ ἢ ἱκετῶν》、つまり《*De vita contemplativa*》が、使徒マルコによりアレクサンドリアに創設された教会の信徒たちにみられる信仰と学問研究の一体化した禁欲的共同体の生活に関する *syngramma* であり、同書が今日でも守られている教会の規定を含み、ひいてはフィロンが使徒の福音の伝道を正しく理解し、認め、歓迎していると述べている。つまり彼は、フィロンの同書の叙述の対象となっている共同体を、アレクサンドリアのクリスト教徒のそれへと転位・同一視し、その共同体のメンバーが *Therapeutae* もしくは *Therapeutrides* と称されたのは、「クリスト教徒」(Christianoi) という名称が一般化していなかったことによるというのである。そしてこの点を正当化するために、彼は、フィロンがクラウディウス帝の治下ローマを訪れた際、マルコの師ペテロに邂逅したという伝承 (*lógos*) のあることをあげている。この場合エウセビオスの意図は、同じ『教会史』の中で、信仰と学問研究 (聖書研究) の一体化をアレクサンドリアの信徒の特色として強調し (II, 17, 14)、パンタイノス以降のアレクサンドリアのいわゆる「信仰教育学校」の学統について述べていることからもうかがえるように (V, 10, 1)、フィロンを典拠とすることにより⁽³⁴⁾、彼自身が属するオリゲネスの学統を正統化することにあつたとも考えられる。しかし、『教会史』にみられる彼のフィロンに関するこうした叙述が、結果的に《Philo Christianus》像の成立の源泉となり、クリスト教世界にユダヤ人フィロン受容を可能にする重要な基盤を提供したであろうことは想像するにたたくない。そして、この観点をさらに裏づけるために、再びフィロンの写本伝承の問題に立ち返る必要が出てくるのである。

フィロンの現存する最古の写本は、10世紀頃コンスタンティノーブルにおいて、Augerius Busbeckius の手になるものだとされる⁽³⁵⁾。これは、現在「ウィーン写本」Codex Vindobonensis theologicus graecus 29 (V写本) と称されるものであり、この

写本によって、はじめて現行のフィロン刊本の冒頭におかれる《Περὶ τῆς κατὰ Μωυσεῖα κοσμοποιίας》、つまり《*De opificio mundi*》が Cohn により発見され、彼の校訂によって 1889 年刊行される運びになるのである。そして注目を要するのは、この《*De opificio mundi*》の冒頭に、十字形で「エウゾイオスにより *σωμάτων* に転写された」と記されていることである。⁽³⁶⁾ このエウゾイオスについては、ヒエロニムスの第 34 書簡ならびに *De viris illustribus* 第 113 章に叙述がなされているが、この両者にみられるヒエロニムスの彼に関する報告は、《*Codex Vindobonensis*》に十字形で書かれていることと内容上符合し、それを裏書するものである。特に第 34 書簡は、オリゲネスにより、232 年パレスチナのカエサリアに創設された信仰教育学校に付置され、後にオリゲネスの熱烈な信奉者であり、ほかならぬ先のエウセビオスの師であるパンフィロスによって再建された、4 世紀東方キリスト教界における最も有力な図書館 *Bibliotheca Caesariensis* の存在を例証する重要な資料である。⁽³⁷⁾ そしてヒエロニムスにしたがえば、パンフィロスにより蒐集されカエサリアに寄贈されたオリゲネスの著作が、4 世紀後半、アカキウス、さらにはエウゾイオスにより、保存上の必要からパピルスに記された *volumen* から *membranae* へと、つまり羊皮紙の *codex* へと転写されたことになり、そうした書物の中には、単にオリゲネスのものばかりではなく、フィロンもあつたであろうことは、容易に想像されてくる。ちなみに、V 写本にみられる *σωμάτων* は、ラテン語の *codex* (*κώδιξ*) の謂にほかならない。⁽³⁸⁾ ヒエロニムスは、*De viris illustribus* のオリゲネスやパンフィロスの項からうかがえるように、⁽³⁹⁾ パンフィロス自身の転写になるオリゲネスの *Hexapla* 等の著書を見るために、このカエサリアの図書館を訪れている。

西方ラテン世界においてフィロンとの邂逅がなされてくるのは、彼に関する *nomina-tim* な言及がヒエロニムス、アムブロシウス、アウグスティヌス等の教父によってなされはじめることからうかがえるように、4 世紀以降である。そして以上のようにみた場合、その邂逅の直接の機縁を提供したのは、ヒエロニムスであつたと考えられてくるのである。ヒエロニムス自身がフィロンを直接読み、かつ利用したか否かについては、⁽⁴⁰⁾ Sychowski 以来疑問視されているが、中世諸写本にヒエロニムスによる *Vita Philonis* や著作目録が巻頭におかれる慣例からしても、また彼と *Bibliotheca Caesariensis* との関係からしても、西方ラテン世界にフィロンを媒介し、その存在を直接知らしめる

端緒は彼によって開かれたといえるのではないか。さらに、ヒエロニムスとアウグスティヌスとの交流からすれば、Possidius の伝える Bibliotheca Hipponiensis にも、⁽⁴¹⁾ヒエロニムスを介してフィロンの写本が存在していたとすら、想像をたくましくすることもあながち不可能ではないのである。

註

- (1) cf. H. L. Goodhart et E. R. Goodenough, *A General Bibliography of Philo Judaeus*, 1937 (in E. R. Goodenough, *The Politics of Philo Judaeus*) p. 190, no. 404. 以下, *Bibl.* と略記し番号を付したものは, 同文献表による。
- (2) *Philonis Iudaei Paralipomena armena. Libri videlicet quatuor in Genesin. Libri duo in Exodum. Sermo unus de Sampson. Alter de Jona. Tertius de tribus angelis Abraamo apparentibus. Opera hactenus inedita ex armena versione antiquissima ab ipso originali textu graeco ... nunc primum in Latinum fideliter translata per P. JO. BAPTISTAM AUCHER*, Venice, Typis Coenobii PP. Armenorum in Insula S. Lazari, 1826, pp. v, 630, 4to. (*Bibl.* no. 441).
- (3) *Viator* II (1971), pp. 251-270, 現在, *The Aristotelian Tradition and Renaissance Universities*, Variorum Reprints (1984) に所収。
- (4) Archives Internationales d'Histoire des Idées, 52. なお『中世思想研究』(XX) 所収の同書に対する筆者の書評参照。
- (5) I in *Traditio* 31 (1975), pp. 99 sqq.- IV in *ibid.* 34 (1978).
- (6) in *J. H. I.* VIII, 3 (1946), pp. 257-297.
- (7) in *Medieval Studies* 4 (1942), pp. 32-42; 5 (1943), 102-114.
- (8) in *Traditio* 34 (1978), pp. 157-192.
- (9) ポルフェリオスの《κατὰ χριστιανῶν》の2回にわたる禁書については, cf. *Socrat. H. E.* I, 9, 6; *Cod. Theod.* XVI, 6, 66.
- (10) cf. *Opera Philonis* Bd. I, pp. LXXXXV sqq.
- (11) cf. H. Savon, *Saint Ambroise devant l'exégèse de Philon le Juif*, 2 vols., 1977, esp. t. I, pp. 243-325 (De Cain et Abel, I, 4, 14 に関する分析)。
- (12) cf. B. Blumenkranz, *Augustin et les Juifs. Augustin et le judaïsme, Recherches Augustiniennes* I, 1958, pp. 225 sqq.; J. G. Gager, *The Origin of Anti-semitism, Attitudes toward Judaism in Pagan and Christian Antiquity*, 1985, esp. pp. 153 sqq.
- (13) cf. R. Devresse, *Chaîne exégétique* in *Dict. de la Bible*, Suppl. 1, coll.

- 1084-1233, esp. 1084-1099, 1105, 1119, 1184, 1225; M. Richard, *Florilèges grecs* in *Dict. de la Spiritualité*, V, coll. 475-512.
- (14) cf. H. L. Goodhart et E. R. Goodenough, *Bibl.*, p. 299, n. 1.
- (15) cf. J. N. D. Kelly, *Jerome*, 1975, p. 177; H. Savon, *Saint Ambroise et saint Jérôme, lecteurs de Philon* in *A. N. R. W.* II, Bd. 21, 1, 1984, pp. 745 sqq.; P. Courcelle, *Les lettres grecques en Occident*, 1948, pp. 70 sqq.
- (16) cf. H.-I. Marrou, *Saint Augustin et la fin de la culture antique*, 1958, cap. II, pp. 33 sqq., esp. p. 37; P. Courcelle, *op. cit.*, pp. 389 sqq.; P. Riché, *Education et culture dans l'Occident barbare* (Pat. Sorb. 4), pp. 83 sqq. 同様のことは、当時のヘブライ語の知識の存在についてもいいうる。cf. Marrou, *ibid.*, pp. 466 sqq.; B. Altaner, *Augustinus und griechische Sprache*, 1939 in *Kleine patristische Schriften*, SS. 129 sqq.
- (17) B. Altaner, *Augustinus und Philo von Alexandrien*, 1941 in *Kleine patristische Schriften*, SS. 181 sqq., bes. S. 193.
- (18) P. Courcelle, *Saint Augustin a-t-il lu Philon d'Alexandrie?*, *Revue des Études Anciennes*, 63 (1961), pp. 78 sqq.
- (19) 拙稿「クザーヌスとネオプラトニズム——クザーヌス写本をめぐる——」(『クザーヌス研究序説』, 国文社, 所収) 参照。
- (20) Codex Cusanus 16, chartaceus, formae octavae, foliorum 154, saeculo XV (anno 1451) in monasterio Gottwicensi scriptus. cf. P. Wilpert, *Philon bei Nikolaus von Kues in Antike und Orient im Mittelalter*, 1962, esp. S. 71, Anm. 14; J. Marx, *Verzeichnis der Handschriftensammlung des Hospitals zu Cues*, Trier, 1905.
- (21) Cohn-Wendland, *Opera Philonis*, VI, Prolegomena, pp. xv sq., および *Bibl.* p. 178. ラテン語写本は3種類に区別されるが、《Codex Cusanus 16》は《Cassellanus》と同種の構成をとっている。
- (22) Cohn-Wendland, *Opera Philonis*, I, Prolegomena, pp. li sq.; Loeb 版, suppl. I, Preface (by R. Marcus), pp. x sqq.
- (23) Cohn-Wendland, *Opera Philonis*, I, Prolegomena, p. xxxvi.
- (24) Loeb 版, suppl. II, Appendix B (by R. Marcus), p. 268; P. Wilpert, *op. cit.*, SS. 72 sqq. なお、このラテン語部分を基に Wendland (*Neu entdeckte Fragmente Philos*, Berlin, 1891) は、散逸した《περὶ ἀριθμῶν》の存在を推定することになる。cf. *περὶ ἀριθμῶν*, ed. K. Staehle, *Die Zahlenmystik bei Philon von Alexandria*, Teubner, 1931, pp. 19-75.
- (25) F. C. Conybeare, *op. cit.*, esp. The Old Latin Version, Introducing Re-

- marks, pp. 139 sqq. ならびに Cohn-Wendland, *Opera Philonis*, I, Prolegomena; *ibid.*, VI, Prolegomena, pp. xviii-xx.
- (26) P. Wilpert, *op. cit.*, S. 75.
- (27) cf. *Bibl.* p. 177 (nos. 298-308); Cohn-Wendland, *Opera Philonis*, VI, Prolegomena, pp. xii-xvi.
- (28) cf. P. Wilpert, *op. cit.*, S. 76.
- (29) H. Savon, *Saint Ambroise devant l'exégèse de Philon le Juif*, t. I, pp. 10 sqq.
- (30) cf. H. Savon, *Saint Ambroise et saint Jérôme*, pp. 745 sq. n. 88, 89.
- (31) F. C. Conybeare, *op. cit.*, pp. 143-4; B. Altaner, *Augustinus und Philon von Alexandrien*, S. 192.
- (32) 本稿註(12), および Ambrosius, *Ep.* 40, 10 (PL 16, 1105 B), 14 (1106B). cf. J. G. Gager, *op. cit.*, esp. pp. 153 sqq.; B. Blumenkranz, *Die Judenpredigt Augustins*, 1946, ed. *Études Augustiniennes*, 1973, SS. 9 sqq.; H. Savon, *Saint Ambroise et saint Jérôme*, pp. 737 sqq.; *ibid.*, *Saint Ambroise devant l'exégèse de Philon*, t. I, pp. 97 sqq.
- (33) cf. J. E. Bruns, *Philo Christianus, The Debris of Legend*, *Harvard Theological Review*, 66 (1973), pp. 141-145.
- (34) エウセビオスのフィロンへの依拠については, cf. R. M. Grant, *Eusebius as the Church Historian*, 1980, pp. 52 sqq., 73 sqq.
- (35) Cohn-Wendland, *Opera Philonis*, I, Prolegomena, pp. iii sq.
- (36) Cohn-Wendland, *Opera Philonis*, I, Prolegomena, pp. xxxvi sqq.
- (37) パンフィロスについては, cf. Eusebios, *H. E.*, VII, 32, 35; Hieronymus, *De viris illustribus*, cap. LXXV et LXXXI; R. M. Grant, *op. cit.*, p. 164. また Bibliotheca Caesariensis については, cf. Courcelle, *Les lettres*, p. 104, 112; Altaner-Stuiber, *Patrologie*, 9 Aufl., S. 8, 139; C. P. Hammond, *A product of a Fifth-century Scriptorium*, *J. I. St.*, 29 (1978), p. 368.
- (38) cf. C. H. Robert and T. C. Skeat, *The Birth of the Codex*, 1983, chap. X, p. 54, n. 1.
- (39) *De viris illustribus*, cap. LXXV (パンフィロス), cap. LIV (オリゲネス); J. N. D. Kelly, *op. cit.*, p. 135; P. Courcelle, *Les lettres*, p. 104, n. 92, p. 107.
- (40) S. v. Sychowski, *Hieronymus als Literarhistoriker*, 1984; Kelly, *op. cit.*, p. 177; P. Courcelle, *Les lettres*, p. 70.
- (41) *Possidi Vita sancti Augustini*, cap. 18 et 31 (PL 32, 14; 39); Altaner, *Die Bibliothek Augustins*, 1948, in *Kleine patristische Schriften*, SS. 174 sqq. なお

Bibliotheca Hipponiensis については、J. Scheele, *Buch und Bibliothek bei Augustinus*, *Bibliothek und Wissenschaft*, 12 (1978), SS. 14 sqq. bes. SS. 66 sqq. に興味深い研究がなされている。